

学級通信「おしゃべり」の実践

～ 1年入学当初を中心として ～

足利市立三重小学校 河内 忠之

1 はじめに

まず初めに、長島貞夫先生の著書「児童社会心理学」の一部を引用させていただく。

「学校に入学することは、いままで経験したことのない未知な世界にはいってゆくのである。今までの生活では、子どもがよく熟知している人々を相手に生活をくりかえしてきたのであるから、普通の子どもであれば、さほど生活に適応することに困難を感じない。好きな近所の友だちと、好きな時に勝手に遊び、もし、いじわるな子どもがいれば、家庭のものから、適当に保護してもらえばよいのである。近所の子どもがみな気に入らなければ、家庭内にとじこもって、親や兄弟だけと、生活していることも許されよう。

ところが、入学と同時に生活空間が新たな構造をもち、拡大するのである。

- ① 家庭に比べて構成員が多い。
- ② 未知な友だちと生活することを強制される。
- ③ いじわるな子、気に入らない子がいても、勝手に家に逃げ帰ってくることは許されない。

多くの未知の友人と集団生活をともにしなくてはならないということは、どんな子どもにも、程度の差こそあれ、心理的に不安定状態をつくり出すのである。

入学当初は、児童は、このような不安定状態にあるうに、集団生活を指導する教師が未知な存在であることは、いっそう不安をかきたてるであろう。教師は単に未知なる存在であるばかりでなく、権威をもった存在であることが、いっそう事態を複雑にするのである。どのように教師がやさしくし、子どもの友だちであるようにつとめても、新入学の子どもは、親や兄弟および周囲の成人から、「先生」の命令に服すること、「先生」にほめられるようにしなくてはならないと、教えられてきているのである。―――」

少し引用が長くなってしまったが、これを読み進めていくうちに、1年生の担任となるものは、この不安定な心理状態にある児童を、できうる限りの方法によって、ときほぐしてやらなければならないと強く感じた。

そして、できることならば、入学する以前、入学式を迎える以前から何とか手がうてないものだろうか。もし、できないとしたら、布石だけでもうっておけないだろうかと考えてみた。なぜならもう入学する1か月以前より、健康診断を初め、一日入学等の機会があって、学校生活に対して、いろいろと子どもなりに考えさせられる場につかってくるのではないだろうかと考えたからである。

子どもの心の不安をとりのぞくには、その発生源の一つとなっている、まわりのおとなの教師に対する見方・考え方も、大いに改める必要があることも、これまた強く感じていたのである。

2 はがき

1年を担任することがきまるやいなや、同学年の先生に相談し、はがきによる、入学に関する通知のしかたをとり入れてもらった。

「ガリバン先生」の著者、須田清先生のアイデアをちょうだいし、「あなたは、1年〇組にきましたよ。先生は〇〇先生で、あなたのくるのをたのしみにしています。」というやなもの、このハガキを、ポストを通して、子どもたちひとりひとりに届けるということである。

入学前の子どもには、自分あてのはがきというものは、お正月に年賀状をもらう程度のものである。きつと子どもたちの心を強くうつことができると考えた。また、そうあってほしいという願いのこもったものでもあった。



かわらせんせい。



大急ぎで印刷をし、出したはがきは左のようなものであった。まずいながらも、絵もカラーインキで入れ、4月3日には、投函できた。

早いところでは、4日には手紙が届き、一ばんおそいところでも7日には届いたようだった。

入学式は10日だから、意とするところは、じゅう分に果たせたのではないかと、自己満足したしいである。

この手紙については、入学後、父母にいろいろかいてもらったところ、38名中、31名の父母から返信が届いた。その内容もさることながら、82%からの回答率は、父母にも好評だったと考えてもよいのではないだろうか。

父母の回答のうち、いくつかをここに紹介する。

T・Kの母親より

「K子ちゃん。K子ちゃんは4組に決まったよ」と、申しましたところ、「どうしてわかったの」と言いました。「ほら、はがきが来たわよ」と言いましたら、目を丸くして、「ほんと」と言って、好きな遊びを途中で止めてかけよって来て、まだ読み慣れない読み方で、うれしそうに何度もくり返し読み、今もハガキを大事にしまっています。

T・Mの母親から

まず、M子ちゃんが、はがきを手に入ってきたのです。「みいちゃん、4組?」「まり子ちゃんも…オ」「本当に本当に本当オ……?」「ワーイ!!カズ君もいっしょならいいのに。行こオー」けっきょく、K君も同じ4組でした。幼稚園も同じなので、3人はとても仲よしいのです。きょうもまたあすしょっていくランドセルをそろえて、三人でやくそくしたのだそうです。

どちらも、子どもたちが、とても喜んでくれ

たことを、記してくれている。子どもたちの心を強くうち、喜びを与えるというねらいは、この2つに限り達成されたといえるであろう。

しかし、前にも書いた通り、入学前の子どもたちの心は不安でいっぱいである。次に紹介する2通は、そのことをじつによくあらわしている。わたしが試みたのは、1まいのはがきだけだったがもっと別の方法なども取り入れるくふうをした方がよいことも、教えてくれている。

— A・Kの母親より —

「K子ちゃんお手紙よ」と言うと、「ほんと見せて」と、にこにこしながらかけてくる。「あれ、男の先生だね、お母さん。めがねかけてるよ。こっちはわたしかな。でも、わたしじゃないよね。やっぱりわたしかな」と、しきりに小首をかしげる。「この先生、やさしいかなあ」と、ちょっぴり不安そう。

— S・M児の母親より —

学校へ行けるということで、うれしくてお友だちに手紙を持って見せ歩き、たいへんはしゃいでいましたが、また、反対には、学校は何をするのかと聞いては、1日に4～5回ほど、手紙を読みかえし、していました。

どちらも、はじめて、お子さんが入学するという家庭である。初めての入学に対する親の不安が子どもたちにも大きな影響を与えるものと思った。

子ども・親の不安の解消に少しでも役立ち、教師に対してわずかでも、親しみを覚え、学校を身近に感じさせることができたのではないだろうか。

3 パンフレット

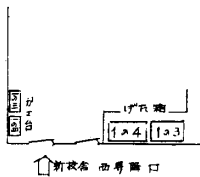
入学式の日、子どもたちの心は喜びと不安で大いに混乱しているものと思う。親に手を引かれ、上級生の世話を受けながら、むがむちゅうで動いている子もいるはずである。

次の日になり、教室はともかく、くつの入れ場、机の位置などわからずに困る子どもでてるのではないかと考えて、かんたんなパンフレットを用意して配布した。下は、これである。

入学
おめでとう
パンフレット
No.2

こんどは、げんごう、かまど台位置についてお知らせいたします。

< 3・4組 >



< 1・2組 >



くつは、げんごう、かまど台の右側に置いてください。

1 組

あべ	いしい	うまさ	みえの	おち子
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ

机間の位置と、げんごう、かまど位置は、図のよう。出席簿(アイウエオの順)のとおりになっております。毎日の朝晩に読んで、変更があれば、お知らせください。

2 組

あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ

3 組

あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ

4 組

あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ
あまき	あらい	あけ	いかわ	えだ

いようである。入学したばかりなのに、(みんなに追いついていけるのだろうか。)などと、その心配は高まるばかりである。

こんな親の不安を少しでもやわらげること、学校では文字を覚えたりすることなどよりも、まずみんなと仲よくいっしょに行動できるようになることなどを重点に指導していることなど、その方針をとりあげ、親に知らせる。それと同時に、こういう学校のあり方に対して協力してほしいむねを呼びかけたりするなど、そのねらうところは、大へん欲ばりである。

このようなことが、子どもたちのよりよい成長への手助けとなるものとたく信じているからである。

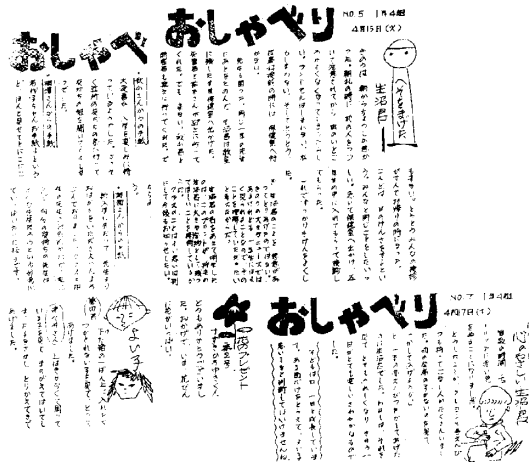
②について

とかく親は勉強いっほんやりである。勉強も大切であるが、もっともっと子どもたちにとっては大切なものもあること。また、PTA活動や学級の会合などについての参加のしかたなどについても、正しく知ってもらふ必要があると考えている。まだまだ、自分の子どもさえよければという考えが多い現今なので、なおいっそう、父母の啓蒙という仕事の必要を感じていた。

それと、「鉄はあついうちにうて」のことわざ通り、子どもを入学させた当初の、父母の心の新鮮なうちに、口はばったい言い方が、正しいあり方を指導していくことが大事だと痛感していたからである。

こんな2つの柱を頭に入れて、それからの毎日、「おしゃべり」を発行していった。ねらいどおりに、事は進まず、ただ単なるお知らせにすぎないものが多かったと反省しているが、そのうちのいくつかを以下紹介してみたい。

(1) 学校での様子を知らせる通信の例



左(№3) 4月12日のもの 「よい子」の紹介

ささいなことでも、善行としてほめてあげること。それが、本人に自信を与えるとともに、学校や教師に対して親しみをもつ要因ともなると考えている。

中(№5) 4月15日のもの 「1年生らしいニュース」の紹介

注射がいやで泣いたり、「〇〇ちゃんがいじめるから学校へ行かない。」などということは、入学当初にはよくあることであるが、その子の親の側に立つと、(どうして、うちの子だけだめなんだろう。)と考え、悩んでしまいがちである。どの家の子もみんな同じように子どもなのだということはこの例を通して知らせてみたかった。

右(№7) 4月17日のもの

№5に続くもので、同一人のよいところをとりあげてほめてやる。一面から見れば悪いところのある子も、他の面から見ればよい子に見える。一面だけとりあげて、かるがるしく、「よい子」とか「悪い子」とか判断して言うてはいけないということを言いたかった。また、学校では、忘れものをして困っている子を見たら助け合っているということも知らせることを意図している。

(2) 父母への啓蒙をはかることを考えての通信例

左(№8) 4月18日のもの

あるおかあさんから、自主的に「おしゃべり」していただいた手紙を取り上げたものである。こちらから要求したもの以外の、この種の「おしゃべり」こそ、わたしの一番望んでいたものである。

さっそく紹介させていただいた。

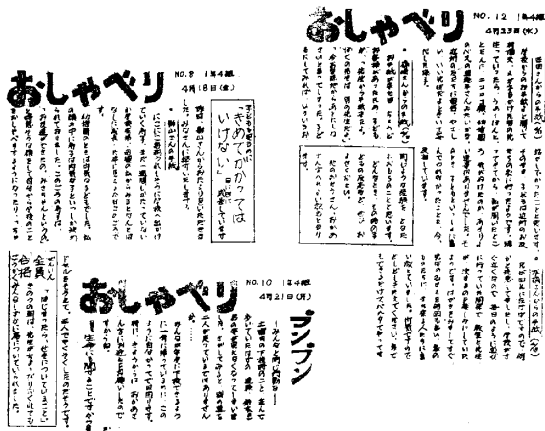
このような自主的な手紙は、2月末までで、14通にのぼっている。そのほとんどは、「おしゃべり」に取り上げ、他の親へ読んでいただいた。

中(№10) 4月21日のもの

自分かってな行動をすることが、いかにみんなに迷惑をおよぼすかを、子どもに注意しているような書きぶりで、父母へも働きかけているのである。予防注射など多数の親や子どもが集まるときに、自分のことだけを考えている親がひじょうに多い。そんな親へ、呼びかけてみた通信の一つである。

右(№12) 4月23日のもの

ときには、このようにして、あるおかあさんからの「おしゃべり」を取り上げ、紹介するだけでなく問題としてなげかける。そして、意見を書くことによってまとめてもらう。こんな方法もとってみた。これに対しては、6通の「おしゃべり」があった。



5 アンケート

このようにして始めた学級通信「おしゃべり」が、ようやく1年を迎えようとしている。今ふりかえてみると、親の啓蒙、そのための話し合いの場とすると意図した点は、まだまだ不十分だったと反省している。

2月下旬アンケートをとってみた。

返信を見ると、回答した家庭の大部分には、「おしゃべり」を見るということが、生活の一部にはいりこんでいるとのことであり、学校から帰る子どもの顔を見れば、「おしゃべりは」と声をかけるほどだとのものも見られた。

また、返信を求める「おしゃべり」を8回発行したわけであるが、「もっと多くてよい。」というのは、わずか1通で、他は全部「今程度でよい。」とのことであった。なお、余白の通信らんりに書いてあることを見ると、書くことの大切さ、必要感も認めても、文字に対する抵抗感などから、なかなか書けないので、アンケート形式によるものをもっと取り入れたらどうだろうかという建設的なものがあった。これらの父母の声には、大いに耳を傾ける必要があると思う。

6 終わりに

こういう学級通信の方法を教えてくださいというのは、山辺小学校の高橋昭清先生である。先生は、以前からこういう毎日の通信を実施しておられる。

その先生の教えに感謝するとともに、わたくしもまた他の先生におすすめの意味も含めて、さいな実践ではあるけれども、ここに発表させていただいた。

最近、ガリ版ではなくファックスをとり入れるようになり、手間もずい分とはぶけるようになった。今後は、もっともっと父母の声も取り入れるような「おしゃべり」にしたいと考えている。

問題も多々ある。それとなく触れたのでは理解していただけないし、はっきりと書きすぎると、やはり感情的にうまくいかないことも起こる。また、父母の「おしゃべり」の取り上げ方にしても記名にするか無記名にするかなど。記名のために発言が少ないとするならば、これまた大いに改めなければならないと考える。

いろいろな問題点をもふくめて、諸先生方の御批判・御指導をお願いし、むすびとする。



評

教育は、教師と子どもと、それを取りまく環境の有機の関係の上に成立し、その関係の良否が教育の効果を決定することがしばしばである。本実践は、子どもを取りまく父母と教師の連携を、学級新聞という窓口を通して計画的に組み立てていった過程であり、多くの教師の願望する実践である。

この実践記録の特長をあげれば、教師が父母の立場を共感的に理解し、一字一句に至るまでこまかく気を配っての編集であり、教師の子どもを見る目の暖かさと思ひやりが充満し、その基本に、教師の力強い教育観の確立が感じられることである。また、この実践は多くの時間と労力を必要とするものであり、この労作が教師と父母と子どもとの連帯を強め一体感を作りあげ得た原因である。教師と父母との関係の中に子どもの生の姿を浮きぼりにすることの重要さもさることながら、子どもにも、この紙面に参加してもらおう着想も、この実践者は工夫していることであろう。今後の継続に期待したい。